

坂の上の暮らし

(2022年度県民ボランティア振興基金事業)

2023年3月1日

させぼ山手研究会(Sasebo Yamanote
Workshop)

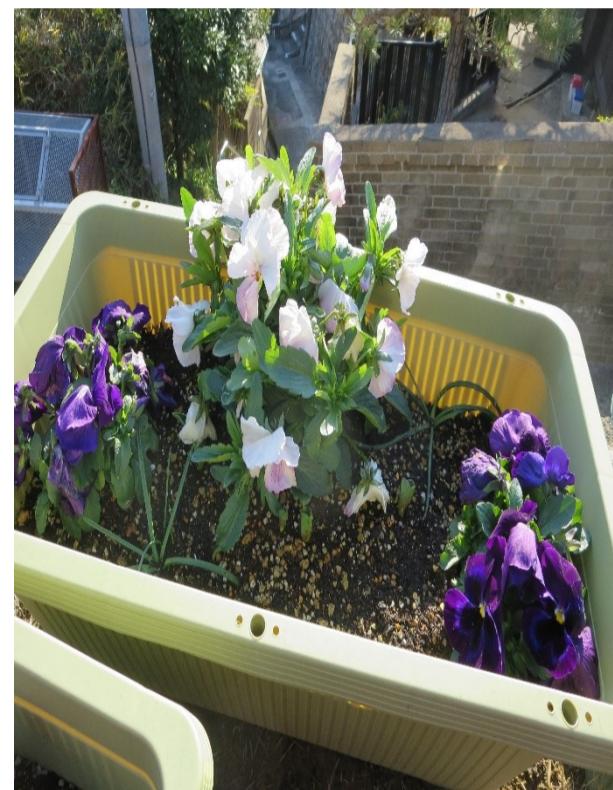
Email:mitsuguhimaki72@gmail.com

電話090(4205)7471

(編集・責任 檜楨 貢 理事長)

坂の上の暮らしに「まち育て」のきざし

- ・三寒四温の季節になりました。坂の上の暮らしにも春らしい陽ざしと風を感じています。佐世保湾の赤崎岳は少しだけふくらみ、港の女神としてのアピール開始です。
- ・白南風町の坂の上の暮らしに私たちは変化のきざしを見つけています。空き地金網フェンスの新設、ある住宅の南面改修、バイク通勤者による新住民の入居等です。夏場の雑草が冬枯れでおとなしくなっている今の時期。坂の上の暮らしの変化はいよいよ目立っています。
- ・これまでに行った私たちのプランターへの花植え、みんなの広場看板掛け、井戸端会議等のイベント実施。それに加えて、私たちの活動本部の旧指山博義邸周辺部の大型ごみの片づけを行いました。そんな活動の影響も少なくないと自負しています。
- ・まちはそこに住む人たちによって「起こされ」「守られ」「育てられ」「つくられ」るものです。「させぼ山手研究会」メンバーはその動きの中にいます。坂の上の暮らしをする住民がプライドをもち、坂の上の暮らしの環境を楽しめていることを感じています。



左の写真はみんなの広場のパンジー 右の写真は旧指山博義邸庭の石整備あと

「展望力」という丘の力を守りたい

- ・坂の上の暮らしの大きな要素に「展望力」があります。まちの先に広がる視界の広さを指します。都心丘陵部の白南風町の坂の上のまちにはまさにその展望力が備わっています。長い時間、展望力を求めてそこに人が住みつづけ、多くの訪問者をひきつけました。都市部における丘の力なのです。
- ・展望力を維持することについて2つほどの問題を感じています。1つは坂の下のマンション等の建物の乱立であり、もう1つは空中を走る電線の存在です。景観を守る生活のあり方やルールづくりが課題ということです。当面はまちを展望できるみんなの視点場（物見の場所）を探すことになるでしょう。

斜面地低未利用地再生事業

長崎県の県民ボランティア基金からのご支援を受け、8月から令和4年度斜面地低未利用地再生の市民活動を進めております。これまで足掛け8か月間、モデル宅地の草刈や花植え、交流イベント等を進めました。これからは次年度に向けてのまとめの段階に入ります。今後とも支援と協力をお願い致します。

コミュニティの再生

「坂の上の暮らし」のコミュニティでも6m道路に近いエリアとそのような道路から離れているエリアとではその様相が違うようです。前者は内向きで新しい動きを受入れにくい傾向がみられます。後者は人口流出が多い一方で、住民結束が強いことが観察されます。この違いはこれからコミュニティ再生のあり方の鍵になりそうです。

斜面モビリティ

坂の上の暮らしの極意は「下る」ことにあると思っています。坂の上に暮らす人たちにとっての仕事、遊び、学び、買物等の行きはできるだけ坂を「下る」ことですませたいようです。帰りも下りになるように巡回のバスやタクシーを利用しようとしています。斜面モビリティの社会サービスにそんな配慮が期待されています。